
もしもけいおん！！のメンバーが

四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしもけいおん！！のメンバーが

【Nコード】

N5556N

【作者名】

四季

【あらすじ】

キャラ崩壊前提条件で更新させてもらいます。

ifシリーズ。

もしもけいおん！！の

メンバーがこんな

性格だったら…。

ちなみに作者は
あまりけいおん!!を
知りません。

このキャラを
出して欲しいと教えて
くださいますと
どこかに出ます。

必ず出します!!

お知らせ心からお待ち
しています。

誤字脱字の指摘も
よろしくお願い
します。

平沢唯は心配症（前書き）

注意

この作品はあらずじで
述べた通りに
けいおん！！の
メンバーがキャラ崩壊
しています。

キャラ崩壊すると
どうなるの？
という気持ちが少しでも
ある方は次に進むことを
すすめます。

作者は

この作品にあまり自信が
ありません。
ですのでしょっちゅう
このような注意を転載
してしまいますことに
ついてすいません。
そんな作者ですが
何卒よろしく
お願いします。

平沢唯は心配症

注意

この作品はあらずじで
述べた通りに
けいおん！！の
メンバーがキャラ崩壊
しています。

キャラ崩壊すると
どうなるの？
という気持ちが少しでも
ある方は次に進むことを
すすめます。

作者は

この作品にあまり自信が
ありません。
ですのでしょっちゅう
このような注意を転載
してしまいますことに
ついてすいません。
そんな作者ですが
何卒よろしく
お願いします。

それでも
受け入れてくれる方は

この文を飛ばして
下さい。

この作品が
皆様に楽しんで
もらえたら
嬉しい限りです。

それでは、

平沢唯は心配症。

始めさせてもらいます。

「ど〜しよお〜」

唯はヘナヘナ〜と床に
座り込んだ。

「どうしたんです、
唯先輩？」

「うう〜、
あずにゃ〜ん!」

「べそかいて抱きつこう
としないで下さい。
鼻水垂らしているなら
なおさら近寄らないで
下さい。」

半径三メートルは
絶対に！」

キャラ設定

平沢唯

サブタイトル通りに
心配症です。
しかもかなりの重症。

中野梓

潔癖症です。
どんなに親しい相手でも
目上の方に対しても
不潔な人は
容赦なく嫌います。
そして毒舌になります。

「あずにゃん、
あのねえ家の鍵閉めて
きたか
忘れちゃったよ」

「唯先輩、
わかりましたから
いい加減に
離れて下さい」

唯は梓から離れた。
両者は三メートル距離が

ある。

「どうしよう、
しかも

ガスコンロに火点けた

ままだ…あ!?

冷蔵庫の扉が

開いてる!!」

一回こうなると

ずっとこの調子だ。

毎度のことだ

梓は馴れてしまった。

「じゃあ、一度帰って来ればいいの
では？」

…

「おお、あずにゃん、
それいいねえ」

が

直ぐに却下される。

「でも、

一度帰ると余計に心配に

なって帰れなく

なりそうですね」

そうだったと落ち込む
ところに

「二人ともどうしたの」

正常な人物登場。

さわちゃん先生。

「先生、唯先輩が不潔で
やつと離れて

くれました。

後はよろしくお願い
します」

すると、

さわちゃんは変な声を

出しながら唯に

近づいていく。

「な、何ですか

さわちゃん!？」

「いいこと

教えてあげる

「してあげるの間違い
ですよ」

何か言った？

「いえ…」そう」

梓の毒舌を先生という
権力でねじ伏せた。

さわちゃんは
ポケットから紙を出して
ニコニコした。

「ほら、

今日ここに書いてある
じゃない。鍵は閉めて
きてるし、ガスコンロに
火点けたままじゃ
ないし、
冷蔵庫も
閉めてきてるし」

紙には何月何日鍵。
とか書かれている。

つまりあれだ。

記録してあるんだ。

「早く心配症
治るといいわね」

「さ、さわちゃん……」

「重症ですから治るのは
難しいと思います」

「そんなこと言っちゃ

ダメでしょ？（潔癖症で
自分だって重症の
くせに）」

ガバツ！！！！

「さわちゃん、
ありがどう！！」

「あ」

唯はさわちゃんに
抱きついた。

梓は気づいた。

先生に誉め言葉

及び

感謝の気持ちを言うと
正常な人物はとうの昔の
話になる。

「いい！！」

何ていい響きなの！！
もつと、もつともつと
誉めて讃えて崇めて
ちようだい！！！！」

はあ、何で
軽音部ってこんなのか
いないの…。

「「自分も

そうでしょ！？by唯&
さわちゃん」」

気づけば唯に

後ろを捕られ

抱きつかれて

鼻水が制服についた。

「やああだあああああ
ああああ！！！」

その日、

軽音部の部室から梓の
悲鳴が聞こえた。

他のメンバーが気絶して
いるのを見つけた時は
すでに外は暗くなっ
ていた。

平沢唯は心配症（後書き）

後書きまで読んで

くださるなんて

感激！！

後、非情に

申しにくいのですが…

こんな作者で

申し訳ないんですけど、

皆様の中で

いい話がいっただけの方が

いましたら

是非

名乗り出て下さい！

そのアイデア使わせて

下さい！

それでは、また更新

できますように…！

田井中律はツンデレだ（前書き）

尺がなくて、

ごめんなさい！……！

田井中律はツンデレだ

「べ、別に

あんたのためにやった

わけじゃないん

だからね！」

始まりはこの一言。

キャラ設定

律ちゃんツンデレキャラ

(ツンデレって

なんだっけ?)

漣ちゃんは

そっけない。

紬ちゃんは

空気読めない。

「律…いつからツンデレ

キャラになったんだ」

「漣、あたしはいつも

こうだよ(嘘でゝす)」

間に紬ちゃん。

「ツンデレ萌え狙い？」

「まさか、律がそんな計算高い女になるはずないよ」

冗談だろうと

その場しのぎで話す漣。

だが、

今回の紬は

空気読めない、

通称KYなのだ。

簡単に引き下がるわけ

なく、それどころか話をあやふやにさせる能力をかねそなえている。

「律ちゃんは女の子になりたかったんだよ！だからこんな無意味なツンデレキャラになっちゃったんだね！」

キラキラ目を輝かせて近寄る紬に対し、反撃の一言。

「ツンデレってモテるんだよねえ」（必ずしもそう

じゃないけど」

紬は耳を動かした。

「それ本当に？」

計算高い女は

あなたです、紬！！

「へっへっん！

ツンデレキャラも使い

こなせばどうってこと
ないのだ！！」

律は威張って言う。

「へえっじゃあ私も

やってみようかな。 澪ちゃんも」

「何で私も…」

「いいからいいから、

それじゃあ『気になって

なんかないんだから！』

と言ってみて」

「おお、紬、いいこと

思いついたな」

それに加担する律。

喜ぶ紬に呆れる澪。

「さあ、壁に張りついて

こちらに向くんだ漣！
そして照れる＆焦り声で
言うのだ」

漣は無視している。
律はニヤニヤしている。

「恥ずかしいがらずに
一緒にツンデレキャラに
なろう！
そうしたらもつと
人氣に火がつくぞ！！」

「ら…」

「ん？何だ漣？」

「ついに言うのね
漣ちゃん！

私
危機逃さずに頭に入れ
ちやうんだから！！！」

ポカッ！
ポカッ！

いい音になる。

「こらああああ！！！」

澪の堪忍袋は切れた。

だが、二人の
暴走は止まらない。

「澪ちゃん…とうとうえ」はいよいよこの
皆は聞いちゃ
ダメだよ？」「何するの
律ちゃん！」

「そう言う発言は言って
ほしくないと作者が
言ってるんだってば」

「え？作者って四季の
こと？」

35番目の四季が」

…え？
35番目の四季って何？
新しいユーザーネーム？

正しくは
この名前で登録したら
同じ人がいっぱいいて
ざっと見35番目ばい
ので勝手に発言している
ことであって特に深い
意味はないのです。

もしかしたら32番目
かもしれないし
40番目の可能性だっ
てなきにしもあらず。

ですので、四季と言
うユーザーを
覚えるのがややこしい
と思われる方は35番
目の四季と覚えてもら
っても構いません。

今回は皆様に作者の名
前だけでも覚えてもら
いたくて
ついついこんなに
書いてしまいました。

「大変！
尺がないよ！？」

「ええ！？」

「本当だ、って
何逃げようとしてるん
だ律と紬」

「ええ？今から
作者と打ち合わせに…」

「違うよ律ちゃん！

漑ちゃんは放置p」「あああ

紬は反省してないね…」

誤解だよ律ちゃん」

またまた紬は問題発言が多い。

その様子を漑は遠くからしっかり見ていて、手が小刻みにプルプルと震えている。

「お前らあああ自重しろをを！！」

部室に響く怒鳴り声。

廊下にいた

生徒達は何か何かと

騒いでいたのを

漑は知らない。

田井中律はツンデレだ（後書き）

曖昧で終了！

…後味悪い…。

次こそは

自信を持って尺のこと

考えて頑張るぞ！

琴吹紬はいたずら好き

いたずらしたい。
いたずらしたい。

彼女は
たくわんのような眉を
もつ。

キャラ設定

琴吹紬
いたずら好き。

真面目な人にはとことん
邪魔する
とんでもないキャラに
今回はなります。

「うつつ」

針に糸を通そうとする
梓。

そこに目をつけた紬。
彼女に火を灯すつもりは
ないはずなのに
こうしているうちに
エスカレートして
いくのだ。

「いたずら…ウフフ」

不適な笑みを溢す紬。
気配を感じた梓は
席を立ち、
紬から離れる。
そんなことは
想定済みの紬は
作戦に入ろうとした。

「紬先輩？
何かおかしいことでも」

「あ、梓ちゃん。
気にしないで？
糸通し頑張って！
(ま、邪魔するけど)」

「は、はい！！」

作戦通りで思わず
ニヤけそうに
なるが我慢。

「(怪我をさせない
程度に…)
わあっ！！！！」

シーン

紬は首を傾げる。

驚かない梓にもう一度。
肩に手を置きさつきより
もっと大きな声で。

「
…」

無反応。

梓はいたずらに慣れて
いるのか？

紬は悔しそう。

「梓ちゃん！！！」

本の少し、
力を加えたただだったが
顔面強打することにな
った。

慌てて梓の顔を
氷枕に当て呪文のような
ことをいい始める。

「あなたを押したのは
田井中律。」

律ちゃんです。」

琴吹紬は一切関係
ありません。」

催眠術的なことを
実行中。

「痛い痛い飛んでいけ」

これで罪滅ぼしをしたと考える紬。

なんだか黒いぞ…。

「む紬先輩…。
痛いです」

「え！？何で！？

律ちゃんが

驚かしたせいで

梓ちゃん

怪我したのよ？」

あくまで律のせいにする
紬。

律がかわいそうにみえてきた。

何て言うから本人登場

しちゃったよ！

「紬…そんな、

ひどいよ」

「ち違うの！！

これはその、ねえ…

（ごめんね律ちゃん。反省
する気はないの）」

仲直りしましよとお茶に
する三人。

だが忘れてはいけない。
いたずらしたいのって
言う人が一名いるじゃ
ありませんか。

「（フッフ、計画の邪魔を
した律ちゃんには
お仕置きしなくちゃ！
これはただの紅茶じゃ
ないのよ〜）」

梓にはミルクティー。
律には…。

「なあ紬。なんだこれ」
「謝りたいから
スペシャル
ブレンドティーに
したのよ！
…許してくれる…？」

スペシャル
ブレンドティーとは
色々な物をふんだんに
使った
オリジナルティー。
毎回材料が違うから味も
まったく別物になる、
恐怖の紅茶。
見た目はすごく

美味しそうだから
騙される人は多い。
これだけは
保証できるのが、
九割の確率で
トイレ行き&腹痛になる
こと。

紬が
黒く微笑むまで十秒前。

梓が
ミルクティーを塩辛いと
言うまで八秒前。

律が
スペシャル
ブレンドティーに
手をしたのが七秒前。
口に含んだのが五秒前。

顔色が

悪くなるのが二秒前。

そして席を立って
走り抜く。

行き先は言わなくても
お分かりだろう。

「こんなに
おいしいのに」

と言って飲んだら
吹き出した紬。

自業自得です。

でも、ここで負けじと
意地を張って茶菓子に
手を伸ばし
口直しにケーキを
頬張った姿は
かわいかっただろう。

琴吹紬はいたずら好き（後書き）

律ちゃんごめんなさい。

（梓ちゃんも）

しかし紬ちゃんは

またまた

いたずらの領域を越えて

再び

戻って来るでしょう。

中野梓は笑いのツボが多すぎる

ヤバイ。

笑いそうだ。

これで腹筋がマジで

本当に鍛えられて

筋肉ついちゃう。

ダメだ！

もう我慢できない！！

わらっていいですか？！

キャラ設定

中野梓

笑いのツボが多すぎる、

一度笑えば

なかなか止まらない。

ある意味大物か？

これは
けいおん！！のメンバー
達のある話。

「澪ちゃんおはよう」

「唯おはよ…う…？」

「おはつよ唯…！？」

「…おはよう唯ちゃん」

「みんなどうしたの」

気づかないのは唯だけ。
鏡を見てみればすぐに
わかる。

大きな大きなホコリが
唯の髪に飾りのように
くっついているのだ。
誰かツツコミいれる。

「ぷっ／＼／」

約一名笑いを
こらえないのがいる。

中野梓

彼女が笑い出したら誰も
止められない。
ホコリ、たったそれだけ
なのに笑えるのは
すごいと思う。

誰がツツコミするのか？
早く教えてあげなよ。

「なあ唯」

「なあに、律ちゃん？」

ただ今の配役

律 ツツコミ

紬 ボケ

澪 通行人的なあれ

(エキストラ?)

梓 傍観者かつ笑いを
こらえ…てない…

「律ちゃん、どうぞ」

「あ、あんな唯の髪に」
「髪に？」

「（頑張れ律！）」

「（ちょ、律先輩の焦ってるところ

ツボにはいる…

ぷぷぷ／／／）」

「紙、神、髪？」

紬のボケが入ったら

梓は部屋の隅で笑いを溢し出した。

早く止めないと、

今のうちに止めないと、

半日笑っている自信は

ありそう。

いや、絶対梓には自信があると思う、うん。

「髪？」

唯は鏡を見たのに

わからないと

言い出した。

ぱっと見すぐわかる

位置にあるのに…なぜ？

あれか、

きっと光の反射がどうの

こうで見えないんだな

きつと！

それならそうと言って
くれればいいのに。

「(ツツコミが通用しない
だと!?)」

律がビククリ驚き、漑は
というと…。

「……………」

衝撃が強すぎたのか
立ったまま放心状態(?)

「(ツツコミ役なのに
ツツコミを…律先輩の
ツツコミを無効にする
唯先輩ってある意味
すごいかも…。
それに漑先輩が
放心状態って//////)」

肩がぴくぴくしてる梓、
さつきから笑いを小さく
溢していたのが徐々に
大きくなってきたー

「アハハハハハ!!!!////////////」

シーン…。

梓、よく周りを見て！
みんな

静まり返ってるよ！？

「ぶぷー、／／／唯先輩髪に
飾りのようにくつついて
いますよ／／／／／」

「ホコリがなっ！（やっと
ツツコメた…）」

「ええ〜本当だ〜。全然
気づかなかった」

何を
のんきなことを言っ
ているのですか唯先輩。

そんなことより
笑い転げてる梓を
どうにかしようよ
みんな！！

梓は確実にキャラ崩壊に
なってしまったの
でした。

ってそのつもりで書いて
いるんですけどね…。

中野梓は笑いのツボが多すぎる（後書き）

なかなか手ごたえありえ何でもありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5556n/>

もしもけいおん！！のメンバーが

2010年10月10日09時26分発行